

三類本『人麿集』の萬葉歌

——次点本的性格をめぐって——

池原陽齊

はじめに

平安時代の文献に複数の萬葉歌が採取されることはめずらしい現象でない。とりわけ『古今和歌六帖』に約千二百首、『拾遺和歌集』に一二三首が入集する^{①②}など、十世紀後半以降に成立した歌集にはまとまった数の萬葉歌がとられることも多い。

これら仮名文献所収の萬葉歌は『萬葉集』の伝来や享受を考えるうえで重要な資料であると言ってよいとおもいますが、本稿ではそれら仮名文献のうち『人麿集』をとりあげ、所収萬葉歌の性格について、『萬葉集』との関係を検証する。『人麿集』の系統は多岐にわたるので、まずは藤田洋治の整理にもとづき、各系統を代表する伝本とその歌数を提示する^③。

一類本 第一系統 書陵部蔵(五一・一・二)本 二四一首

第二系統 書陵部蔵(五〇六・八)本 三〇一首

第三系統 冷泉家時雨亭文庫蔵枡形本 一八〇首

二類本 書陵部蔵(五〇一・四七)本 六四四首

三類本 冷泉家時雨亭文庫蔵義空本 七六六首

四類本 冷泉家時雨亭文庫蔵定家様本 二九六首

五類本 大東急記念文庫蔵本 一四五首

歌数を一瞥しただけでも、系統間における相違の著しい

ことがわかる。この多岐にわたる系統全体についてかぎられた紙数で言及することは不可能であるし、これほど所収歌の数が異なる以上、『萬葉集』との関係も各系統に即して個別に論じねばなるまい。そこで本稿では、一・二類本を視野に入れつつも、三類本を主たる検討対象とする。

三類本は上・中・下の三巻で構成される七六六首本。『人麿集』諸本中もつと大部な系統である。この系統を代表する伝本の冷泉家時雨亭文庫藏義空本はカタカナ書きの特異な本文を持つが、同文庫蔵の承空本や清誉本、素寂本なども総じてカタカナ表記である点を考慮すると、僧侶が日常書き慣れた仮名をもちいた結果と見做すのが穏当だろう。三類本が義空本以前の段階——この点は後述する——からカタカナ表記であったとは考えにくく、この表記を『萬葉集』との関係で特筆する必要はあるまい。⁴⁾

つぎに、なぜ三類本を対象とするのかという点について概括しておく。『萬葉集』の伝来・享受とかかわって、近時の研究で注目されているのは一類本⁵⁾と四類本⁶⁾であるが、三類本にも以下のような興味ぶかい特徴がある。

- 1、総歌数七六六首のうち六四三首を萬葉歌が占める。
- 2、『萬葉集』の漢字本文や題詞・左注を引用する箇所がある。

3、所収萬葉歌に『萬葉集』の巻数をしめす「出典表

記」が附されている。

4、他系統の『人麿集』ではなく、次点本訓をふまえるとおぼしき本文が散見する。

こういった特徴は、三類本が『萬葉集』を直接受容したことを示唆する。この集の伝来・享受史上における三類本の価値は小さくないと考えられよう。以下ではこれらの特徴を具体的に確認し、その実態を検証する。

ただし、3の「出典表記」については少々問題がある。出典表記とは、三類本の萬葉歌六四三首中、五四五首にみえる「七」、「十」、「十一」といった『萬葉集』の巻数をしめす頭書のことである。『萬葉集』との直接的な関係を考えるうえで看過できない徴証ではあるのだが、三類本編集時に存したものか、それとも後補されたものか⁸⁾が分かれており、確定するだけの材料を現状欠いている。そこでこの注記については別に論じる機会を設けることとし、本稿では排列と本文に検討範囲をしぼり、そこから得られる情報によって『萬葉集』の享受・伝来史における三類本の位置づけを明らかにしたい。

一 『人麿集』の成立と三類本の編集事情

まずは、三類本の具体的な検討にさきだつて、『萬葉集』の採取時期とも密接に関連する『人麿集』そのものの成立

について、研究史を整理しておきたい。外部資料に具体的な記録がのこるわけではなく、内部徴証から考えていくことになる。

さて、『人麿集』の各系統中、もつともはやくに成立したと推定されているのは一類本である。上・下巻にわかれ、上巻六十三首中三十三首を『萬葉集』の人麻呂歌がしめる。一類本は上述のとおり三系統にわかれるが、第二系統は第一系統の末尾に藤原輔相作と推定される非萬葉歌群「国名隠題歌」を附加したもので、第三系統は第一系統の二一八番歌以降などを缺く零本であるので、ここでは第一系統に即して整理する。

一類本の成立に関しては、定家本系『拾遺集』よりもふりい形態・本文をとどめると認定される異本系『拾遺集』と一類本の本文が類似することを論拠に、両者が直接の関係にあると論じた山崎節子の説がたかい蓋然性を持つ。さらに山崎は『萬葉集』・一類本・異本系『拾遺集』を対照し、『萬葉集』と一類本に排列の一致する箇所がある一方、『萬葉集』と異本系『拾遺集』にはみあたらないことなどから、「拾遺集が先に成立していた人麿集を資料に人麿歌を採択したと考えるべき」と結論づける。妥当な推定であり、一類本、ひいては『人麿集』の成立は『拾遺集』編纂以前、十世紀後半ごろと判断してよいだろう。

この一類本を核に編集されたとおぼしき系統が二類本である。同本についても山崎の指摘が説得力をもつ。山崎は一類本第一系統二四一首のうち、二二七首が二類本に収載されており、両者の関係は緊密と認定する。また、二類本の三九二〜四一五番歌という、『萬葉集』の巻一・二・七・十・十一所収歌の排された箇所注目し、この一群が『萬葉集』と排列を異にするが、一類本とは一致するといふ、両者の直接関係をつよく示唆する徴証をも指摘する。この指摘にもとづく「Ⅱ類本人麿集の構成の中にあつて、Ⅰ類本の存在を無視することを不可能にする」という氏の結論には間然するところがない。

それでは、三類本の編纂についてはどのように考えることができるだろうか。一〜三類本の萬葉歌入集状況を端緒に、この問題を検討してみたい。

イ、一類本 萬葉歌二二一首（重複歌五首）／総歌数二

四一首

ロ、二類本 萬葉歌四六五首（重複歌十三首）／総歌数

六四四首

ハ、三類本 萬葉歌六四三首（重複歌十六首）／総歌数

七六六首

ニ、一〜三類本重載萬葉歌 九十四首（重複歌一首）

ホ、一・二類本重載萬葉歌 一九二首（重複歌一首）

へ、一・三類本重載萬葉歌 一―三首（重複歌二首）

※「二」をはぶくと十九首。

ト、二・三類本重載萬葉歌 一九五首（重複歌二首）

※「二」をはぶくと一〇一首。

イハは一―三類本の総歌数中の萬葉歌の数をしめした
もの。一見すると二類本の萬葉歌の比率がややひくいよ
うであるが、これは分母の六四四首が非萬葉歌群「国名隠題
歌」六十七首をふくむためで、同歌群を除外すると五七七
首中四六五首が萬葉歌となる。三系統ともに萬葉歌の占め
る割合は圧倒的といつてよい。

つぎに、ニ―トの重載歌であるが、三系統に重複する萬
葉歌（二）は九十四首。分母が比較的少ない一類本はとも
かく、二・三類本における比率はさほどでもない。また、
山崎が一類本から二類本という編集過程を論証したとおり
ホは相当数にのぼるが、へとトはやや少なめで、とくに
二・三類本がいずれも随分な数の萬葉歌をふくんでいるこ

とも考慮すれば、トはかなりの低率である。しかもへ・ト
は二の三系統重載歌込みの数であるので、三類本に入集す
る萬葉歌のうち、他系統所収歌は二―四首に過ぎない。三
類本所収の萬葉歌は、三分の二程度が『人麿集』諸本中の
独自歌ということになる。

それでは、三類本はどのような資料から萬葉歌を採取し
たのか。以下のような排列に照らせば、『萬葉集』と考え
るのが妥当なようである。なお、①③は『人麿集』の系
統をさす。

左の表は、三類本冒頭四十六首から非萬葉歌六首（五・
一五・一七・二九・三三・四一）をのぞき、『萬葉集』お
よび一・二類本と対照したものである。いずれも卷十所収
歌で、千八百番代のあいだに、ところどころ二千三百番代
が排されるという順序となっている。三類本萬葉歌の入集
事情について、たとえば『六帖』のような仮名文献から萬
葉歌を抜きとつたとすると、ここまで千八百番代のうたば

萬	①	②	③
1835		20	1
1836			2
1814			3
1812			4
1839			6
1876			7
1874			8
1875			9
1833			10
1834			11
1838			12
1832			13
1843		1	14
1844			16
1845			18
1816			19
1815			20
1817			21
1818			22
1856			23
1877			24
2330			25
1835			26
1878			27
2329		9	28
1862			30
2326	163	8	31
1871			32
2327			34
1859			35
1858			36
1857			37
2325	162	5	38
2328	164	6	39
1873			40
1846			42
1847			43
1848			44
1853			45
1851			46

かりがならばとは考えにくい。三類本の採歌資料が『萬葉集』である蓋然性はかなりたかいと見做せよう。

一方、二千三百番代のうたに関しては、一・二類本との重複歌が多く、他系統の『人麿集』が採取元である可能性も考えられる。しかし、二三二七、三〇番歌の二首は三類本独自歌であるし、千八百番代にも二類本採録歌が二首のみあり、かならずしも一律の基準があるわけではない。これら重載歌の性格を把握するためには、『萬葉集』の本文との対照が欠かせないので、この点についてはあらためて三節で論じる。ひとまず三類本が大勢としては『萬葉集』に依拠するという点を確認し、論をすすめたい。

なお、以上の徴証によれば三類本が他系統の『人麿集』とは無縁に成立したと考えることも可能なようであるが、つぎの一首がその可能性に疑問を投げかける（『人麿集』の引用は『和歌&俳諧ライブラリー』（日本文学MOEの図書館）による）。

チリヌトモイカテカシラム 山サクラハルノカスミノ
タチシカクセハ (③・五七)

当該歌は一類本第二系統と二類本の独自歌群である「国名隠題歌」中にみえる一首である（二句に「伊賀」を隠す）。三類本は原則当該歌群を載せないが、このうたのみ「詠花」の題のもとにおさめられている。一・二類本との

関係を考えるにあたって重要な例で、その採取事情に関しては後藤利雄の指摘が傾聴に値する。¹⁵⁾

どうして六十六首のうちの一首だけを採ったのであるうか。……異本の編者は最初「国名歌」を全部採りいれようとしたのではないかということである。そして恐らくそれらの歌を全部切り離して各項目下に配っていたであろうが、あとで疑わしくなつて取り去ることにしたのではないだろうか。そして偶々除き忘れた一首が集中に残るといったことになつたのではないかということである。

「国名隠題歌」が一首のみ、しかも一・二類本とは異なる題で三類本にとられている理由として、後藤の推定は穏当といつてよい。では、どうして一度は「国名隠題歌」を排しながらそれをのぞいたのか。「国名隠題歌」を採取した以上、もともと三類本は一類本第二系統か二類本を核として編集が企図されたとおほしい。

そして、非萬葉歌群「国名隠題歌」を除去する一方、多量の萬葉歌を採取するという事実は、この本の編集方針が、他系統の『人麿集』所収歌を中心としたものから、『萬葉集』を中心としたものに切り替えられ、現在みる形となつたことを想定させる。この点からも、現存する三類本編集時の基本資料は『萬葉集』であると考えてよいであろう。

二 現存三類本文の成立をめぐって

前節では、重載歌の数量・入集萬葉歌の排列・「国名隱題歌」の除去という三つの観点から、三類本が『萬葉集』を直接参照した蓋然性のたかいことを確認した。つぎに検証しておきたいのは、三類本が依拠した『萬葉集』がいつごろの本なのか、換言すれば、現存する三類本の本文はどの時代に生まれたものなのかという点である。

下限を特定することは比較的容易である。この系統の現存最古写本である義空本をみると、上巻冒頭の「巻頭識語¹⁶」と下巻末尾の本奥書に以下のような記述がある。

・写本云／寛元三年八月五日以或／所御本書了 此書一／本書也／歌都合七百六十首／尤可秘、、(寛元三年(一一四五) 巻頭識語)

・本云／建長五年五月八日以徹前槐／御本書写校合了／可秘、、／日孝(建長五年(一一五三) 本奥書)

巻頭識語によれば、寛元三年に「或所」に蔵されていた稀観本の「御本」を某かが書写したという。この某は本奥書に徴すれば、「徹前槐」こと衣笠家良と判断できる。¹⁷その家良の寛元三年書写本(徹前槐御本)を建長五年に転写したのが日孝である。日孝は詳細不明だが、建長五年から七年にかけて家良や真観(葉室光俊)所持の私家集を書写

したことが知られており、「家良や蓮性・真観に近かった人」と推定されている。¹⁸この日孝書写本を再度転写した本が現存する義空本である。義空本自体に書写奥書はないが、義空と関係のふかい承空の私家集書写活動が永仁元年(一一九四)から嘉元元年(一一三〇三)と判明している¹⁹ので、同時期とおぼしい。義空本の精確な書写年代は不明であるが、以上のような書写の経路を確認すると、現存する三類本の本文成立の下限は寛元三年と判断できる。

一方、上限の特定はむずかしい。三類本は季節や恋・旅といった部類によって排列された、いわゆる「部類歌集」の体裁を持つ。こういった部類排列の私家集がはじめて陸續と編集されたのは『後撰集』以降、『拾遺集』以前と推定されている。²⁰三類本もその一斑とみて差しつかえなければ、十世紀後半の成立となり、「萬葉集」の伝来と照らしあわせると、次点本時代のごく初期に成立した歌集と見做すことができる。

ただし三類本成立の上限は、この時期よりもくだる可能性がたかい。三類本が一類本第二系統か二類本を核に編集されたことは既述のとおりだが、おそらく後者とおぼしいからである。「国名隱題歌」をのぞく三類本の非萬葉歌一二二首中、一・二類本双方との重複歌は十四首、二類本との重複歌は五十首をかぞえるが、一類本のみとは一首も重

複しない。このような重複歌の偏在は、二類本から三類本へとという展開をつよく示唆する。その二類本が、編纂にあたって一類本や『萬葉集』のほかに『拾遺集』も利用していることは、山崎に指摘がある。すると、その二類本を原形とする三類本の成立も、当然ながら『拾遺集』以降と考えるべきであろう。

そもそも、『拾遺集』以前に成立したと目される『是則集』・『堤中納言集』・『興風集』といった部類歌集は、いずれも十世紀前半ごろに活躍した歌人のものであり、久保本哲夫はこの列に三類本をくわえることに危惧をしめしている。二類本との関係からみても、妥当な判断といつてよい。それでは三類本は『拾遺集』編纂以降の、いつごろに成立したのか。それが問題であるが、この点は本文を検証したのち、あらためて考察したい。

さて、成立時期についてはひとまず留保をつけたが、家良が寛元三年に書写した「或所御本」までは遡及できる以上、三類本の現存本文が仙覚本の影響を被らないことはみとめてよく、次点本の附訓に依拠する蓋然性のたかいことは推測しうる。この点に関しては、半世紀以上まえに、簡略ながら後藤に以下のような指摘があった。²³⁾

仮字万葉としてすでに指摘されている赤人集や柿本集下の前半などに比較すると、それらがすでに仮字万葉

として存在していたものが赤人集や柿本集に誤られたものであるのに対し、これ（三類本——稿者注）は意識的に万葉集から訓のみを採択したものであるという違いは存する。しかし万葉集から直接採取したことが明らかなものだけに、これを仮字万葉の一種として扱うことは適当であると思われるのである。／＼して本書の祖本は、その識語によっても、少くとも仙覚の新点以前のものであることが明らかである。とすると万葉歌は次点歌と見てよいことになるわけである……。

追認すべき指摘である。そして、後藤の依拠した伝本は近世初期書写の書陵部蔵（五〇一・二九五）本であったが、鎌倉時代後期写の義空本が紹介された今こそ、『萬葉集』伝来史上における三類本の価値を再検証する必要があるのではないだろうか。

三 三類本文の性格——次点本との関係から——

それでは、具体的に三類本『人麿集』の本文の性格を検証する。まずは『萬葉集』との関係が確実なものとして、「はじめに」の2で指摘した『萬葉集』を引用する例をとりあげる（引用は塙書房CD-ROMにより、本文異同や次点本訓に関しては『校本萬葉集』および各種影印・複製本を参照した）。

A (日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首

并短歌)

久堅乃 天見如久 仰見之 皇子乃御門之 荒卷惜毛

(卷二・一六八)

久かたのあめみしことにあふきみし すゑのみこと
あれまくもおし (①・四十一)

ひさかたのあめのふることあふきみし みこのみこと
のあれまくおし (②・二五九)

日並皇子殯宮時

ヒサカタノソラミルカコトアフキミシ ミコノ
ミカトノアレマクラシミ (③・六五七)

B 弓削皇子遊吉野時御歌一首

瀧上之 三船乃山尔 居雲乃 常将有等 和我
不念久尔 (卷三・二四二)

春日王奉和歌一首

王者 千歳二麻佐武 白雲毛 三船乃山尔 絶日安
良米也 (同・二四三)

或本歌一首

三吉野之 御船乃山尔 立雲之 常将在跡 我思莫苦
二 (同・二四四)

右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出

万葉集云弓削皇子遊吉野時御カヘリニ春日皇奉和歌

但件歌出人麿之哥集

ミヨシノミフネノ山ニタククモノ ツネニアラムト
ワカオモハナクニ (③・六七八)

Aの場合、二句は「そら」とする三類本よりも、「あめ」とする一・二類本の方が萬葉歌に忠実なようだが、金沢本・類聚古集などが「そらみるごとく」、古葉略類聚鈔・紀州本などが「ソラミルカコト」と訓むように、三類本は次点本にちかい。また四句を「ミコノミカトノ」とするのは三類本だけで、一・二類本は相違が著しい。しかも当該句の傍書「皇子御門」は『萬葉集』の本文にはほぼ等しく、参照の痕跡とみとめられる。

次のBの歌群は、最後の或本歌のみ三類本にとられている。注目すべきは詞書で、「万葉集云」という但し書きに続けて、二四二、四三番歌の題詞と、二四四番歌の左注を抄出し引用している。「春日王」を「春日皇」と誤記するが、歌群全体の情報を勘案した詞書といつてよく、『萬葉集』を丁寧の確認したことを示唆する例といえる。

右のような例は『萬葉集』に依拠することがあきらかである。ただし、『萬葉集』の漢字本文や題詞などの引用は下巻の一部に偏在しており、数も五十首程度とそれほど多くない。三類本全体の価値を主張するためには、次点本との関係から、三類本の和歌本文の有用性をさらに明確に指

摘せねばなるまい。そこで、以下では三類本の本文と萬葉歌の關係をおさえてゆく。なお、三類本の主たる典拠が一・二類本ではなく『萬葉集』であることを明示するため、三系統の重複歌をとりあげる。

C 吾屋戸ル 開秋芽子 散過而 實成及丹 於君不相鳴

(卷十・二二八六)

我宿にさける秋はきちりすきて みになる 三字空白

あはぬ君故 (①・二二七)

わかやとのほたてふたからつみはやし みになるまで
に君をこそまで (②・五四七)

ワカヤトニサケルアキハキチリスキテ ミニナルマテ

二君ニアハヌカモ (③・二七二)

D 戀敷者 氣長物乎 今谷 乏之牟可哉 可相夜合

(卷十・二〇一七)

こふるひはけななきものを こよひさへともしかるら

んあふへき物を (①・七四)

こふる日はけななきものを こよひさへともしかるへ

くあふへきものを (②・五四)

コヒシキハケナキモノヲ イマタニモトモシムヘシヤ

アフヘキヨタニ (③・一四〇)

E 吾妹兒之 赤裳漚塗而 殖之田乎 苜將藏 倉無之濱

(卷九・一七一〇)

わかせこかあかもぬらしてうへし田を かりてをとめ
んくらなしの山 (①・一七五)

わきもこかあかもぬらしてうへし田を かりておさめ
むくらなしのやま (②・七二)

ワキモココアカムヌラシテウヘシタヲ カリテヲサメ

ムクラナシノハマ (③・六六九)

F 黄葉之 落去奈倍尔 玉梓之 使乎見者 相日所念

(卷二・二〇九)

紅葉はのちりぬるなへに たまつさのつかひをみれば

こよひおもほゆ (①・四八)

紅葉、のちりぬるなへに たまつさのつかひをみれば

つかひおもほゆ (②・四〇二)

モミチハノチリユクナヘニ タマホコノツカヒヲミレ

ハアヒシオモホユ (③・六五二)

G 黙然不有跡 事之名種尔 云言乎 聞知良久波

苛者有来 (卷七・二二五八)

なほあらしにことなし草にいふことを き、てししら

はうれしからまし (①・二五)

猶あへとことなしくさにいふことを き、てししらは

うれしからまし (②・三九七)

モトアラシトコトノナクナニイフコトヲ キ、シルラ

クハスクナカリケリ (③・五〇八)

Cの結句と、Dの初句・三句・結句は同種の例である。

Cの結句「於君不相鳴」に対して、一類本が「あはぬ君故」とやや、二類本が「君をこそ待て」と大きく相違するが、三類本のみは「君ニアハヌカモ」と一致する。Dの初句「戀敷者」と三句「今谷」、結句「可相夜谷」に対応するのも三類本だけで、ほか二本は漢字に忠実でない。

Eの結句は一・二類本のほか「六帖」(一一一)も「くらなしのやま」とし、仮名文献では「やま」が一般的だが、三類本は萬葉歌にひとしい。なお、一類本は傍書をおぎなうと「くちなしの花」となる。「ち(知)」と「ら(良)」は字形が似ており、「はな」が本文の「やま」よりも萬葉歌の「はま」にちかいかを考慮すれば、一類本も本来「萬葉集」に忠実だった可能性はある。しかし、明確な一致をみるのは三類本以外にない。

Fはやや特異な例である。二句を三類本のみ「チリユクナヘニ」とし、萬葉歌と一致する点も目をひくが、さらに重要なのは三句である。一・二類本「たまつさの」、三類本「たまほこの」とあり、一見すると三類本は萬葉歌の「玉梓之」と距離があるが、当該句は金沢本・類聚古集・廣瀬本・紀州本と、次点本も総じて「たまほこの」と訓んでいる。このような漢字と即応しない次点本訓との一致は、両者のつながりを示唆しよう。

Gも注意すべき例といってよい。初句は次点本にも、「もたらしと」(元暦校本。墨訓は「もたらしと」)、「ナホアラシト」(廣瀬本・紀州本)という対立がある。前者が三類本、後者は一類本と近似する。三類本は「モトアラシト」と小異こそあるものの、平仮名の「た(多)」と「と(止)」は字形が似るので、誤写の想定は容易である。

この初句に関しては、どちらが次点に近いか、厳密には決定できそうにない。しいていえば平仮名別提訓本の元暦校本と一致する三類本の方が古態と見做せるということになるが、それ以上の追究は困難である。しかし、結句の「うれしからまし」(一・二類本)と「スクナカリケリ」(三類本)の対立については、元暦校本・廣瀬本・紀州本がいずれも「すくなかりけり」とする以上、次点本と近接するのは三類本とみてよいであろう。

以上のような本文上の徴証は、三類本が次点本の訓を撰取し、編集されたことを示唆している。『萬葉集』伝来史上における三類本の価値を明示する事象といつてよい。また上記の挙例と関連して、つぎの一首も注目に値する。

嶋宮しまのみや 勾乃池之まがりのいけの 放鳥はなとり 人目尔戀而ひとめにこひて 池尔不潜いけにかくかぞ

(卷二・一七〇)

しまみやのみかりの池のはま千とり 人めにみえて

いなに及はす

(①・四二)

しま宮のまかりのいけのはま千とり 人めをちかみお

きに及はす（②・二二三）

シマノミヤ（音）ミカリノイケノハナチトリ ヒトメニコヒ

テイケニスマス（③・六五八）

三類本はA・Bとおなじく『萬葉集』の本文を引用する例であるので、同集を直接参照したことは疑いない。その点をふまえ両者の関係を確認すると、初二句に小異がある。また、四句は一類本、結句は一類本と三類本に傍書が存するため、大きな異同が生じている。検討すべき要素が多いので、当該歌については次点本の附訓も総覧する。ただし、四句「ひとめにこひて」は次点本以降、現在まで改訓がないので割愛した。

初句…金沢本・類聚古集・廣瀨本・紀州本「しまみや

の」、廣瀨本伊云・紀州本左訓「シマノミヤ」、

京大本代緒「シマノミヤノ」

二句…金沢本・廣瀨本・紀州本左訓①「まなのいけな

る」、類聚古集・紀州本「とまりのいけの」、廣

瀨本伊云「マカリノイケノ」、紀州本左訓②

「マカリノイケノ」、京大本代緒「マケノイケ

ナル」

結句…金沢本「く、らむ」、類聚古集・廣瀨本・紀州

本「く、らす」、廣瀨本伊云「イケニハスマス」

（傍線部のみ伊云）

『人麿集』各系統と対照すると、三句に異同がなく、四句は三類本のみが一致するが、以外の句は単純に割り切れそうもない。まずは一番問題の多い結句を検討すると、左傍書の「タ、テス」は萬葉歌と対応せず、歌意もとりにくい。ただし、「く（久）」と「た（多）」、「ら（良）」と「て（天）」の字体が比較的似ることを考慮すれば、確実とはいえないが、類聚古集以下の「く、らす」と対応する可能性はありそうである。

一方、本文は六音なので右傍書を補入し「イケニハスマス」と読むべきであろう。この歌詞は廣瀨本所引の散逸本「伊本」と一致する。²³「不潜」を「住まず」と義訓に解した例であり、偶然の一致とは考えにくい。次点が三類本に採取されたのではないか。なお、二句には「ミカリ」と「マカリ」の小異があるが、これを誤写とみてよければ、当該歌は全体が伊本にひとしくなる。当該句には『萬葉集』本文の傍書もあり、誤写の蓋然性はひくくない。もちろん三類本の本文がことごとく伊本と一致するわけではなく、同本を三類本が依拠した伝本とは見做せないが、次点本の直接参照を補強する例と判断できる。

『千五百番歌合』に引用された萬葉歌に即して五月女肇志が指摘するように、平安時代には現存する『萬葉集』伝

本にのこらぬ訓みも流布していたとおぼしい。⁽²⁶⁾伊本との一致は、三類本が、現存しない次点本に附されていた、失われた訓の発掘にも寄与する可能性を示唆している。この方向も、さらに探究をかさねていくべきであろう。

おわりに

以上、三類本『人麿集』所収の萬葉歌が次点本訓に多く依拠することを、実例に即して述べた。この三類本は、これまで『萬葉集』研究の側から注目されたことは皆無といつてよい。また、私家集研究の側からも、部類歌集としての意義についてはともかく、『萬葉集』の伝来という観点から検討されることは希であった。⁽²⁷⁾

しかし、ここまで論じてきた徴証に照らせば、三類本は次点本訓に比較的忠実な、信頼性のたかい本文である。また、六四三首という多量の萬葉歌を入集させていることも、注目すべき点といつてよい。『六帖』を別にすれば、次点本時代の萬葉歌をこれほど多く採取した文献はめずらしく、三類本は、平安時代における『萬葉集』の流布や訓読のありようを考えるにあたって、欠かせない資料と見做せよう。殊に三系統の重複歌を閲すと、一・二類本と比して三類本の本文が次点本に近接する点は注目に値する。三類本が『萬葉集』から新規の萬葉歌を抜き出すだけでなく、もと

もと『人麿集』に排されていた萬葉歌を、『萬葉集』によって校訂した可能性をも示唆するからである。

それでは、この三類本はどのような契機で編纂された歌集なのであるか。『拾遺集』以降に成立した部類歌集であり、かつ『萬葉集』を重視するという点を考慮すると、ある程度の推測は可能となる。まず該本が部類歌集だという点に着目すると、部類仕立てによる私家集の編纂が『散木奇歌集』や『清輔朝臣集』など、十一世紀後半以降に一般的となるという久保木の指摘は重要である。

それはこの十一世紀後半が、橘俊綱が法成院所蔵の『萬葉集』を書写し、その俊綱本を藤原頭綱が転写したことをきっかけとして、世に『萬葉集』の写本が流布した時期だからである(『袋草紙』)。研究史をふまえて小川靖彦が概括するように、これ以降『萬葉集』の享受は浩瀚なものとなる。もちろん、衣笠家長が寛元三年に「或所御本」を写す以前の三類本の伝来については確実な資料を缺いており、精確な成立年代を指摘することは不可能である。しかしながら『萬葉集』を重視し、かつ次点本に近い傾向をしめす三類本本文のありようは、『萬葉集』伝本の流布と無縁ではありえない。すると、該本の成立は「拾遺集」以降の「時分のなかでも、平安時代後期以降に位置づけるべきであろう。」⁽²⁸⁾

なお、三類本にも「不合者」（巻十・二〇三八初句）を「コフルヒハ」（③一三四）とするような、『萬葉集』の漢字とも次点本訓とも対応しない本文は存する。本稿での検証結果をふまえ、このような萬葉歌と対立する本文や、出典表記もふくめた三類本全体の性格も検証することによって、当該伝本の『萬葉集』伝来史における位置づけはより明確なものとなろう。如上の展望を確認し本稿を終える。大方のご批正を仰ぎたい。

注

- (1) 『六帖』所収の萬葉歌については、具廷鏞「古今和歌六帖の萬葉歌——萬葉集からの直接採取をめぐって」『文化継承論集』第二巻・二〇〇五）が先行研究における認定数を整理している。認定数には揺れがあるので概数をしめした。
- (2) 渋谷虎雄『古文獻萬葉和歌集成 平安・鎌倉期』（おうふう・一九八二）。重複歌をふくめると二二五首となる。
- (3) 藤田洋治『人麿集』（『和歌文学大辞典』日本文学研究会図書館）。なお、島田良二『人麿集の本文とその成立——第一類本を中心に』（『王朝和歌論考』風間書房・一九九九、初出一九九七）は第一類本の上巻にほぼ相当する歌数・排列をもつ彰考館本を『人麿集』原形の末流本と見做している。ただし、三類本の性格を検証する拙稿の主目的とは直結しない問題であるので、ここでは藤田の整理にならう。
- (4) 承空本は平仮名本の資経本を親本としており、当該義空本に關しても同様の書写過程を考えてよいであろう。遠藤邦基「片仮名書き和歌の仮名遣い——平仮名本からの書写の場合」（『国語文字史の研究』十四・二〇一四）にくわしい。
- (5) 田中大士「久世切と萬葉集抄出本」（『汲古』第五十一号・二〇〇七）、景井詳雅「人麿集の萬葉集享受——一類本上巻の場合」（『和歌文学研究』第九十五号・二〇〇七）
- (6) 竹下豊「冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について——『萬葉集』次点本としての『人麿集』」（『百舌鳥国文』第十七号・二〇〇六）
- (7) 後藤利雄「異本柿本集と萬葉集」（『人麿の歌集とその成立』至文堂・一九六一）
- (8) 竹下「解題」（『冷泉家時雨亭叢書』第七十二巻・朝日新聞社・二〇〇四）
- (9) 片桐洋一「柿本人麿異聞」（和泉書院・二〇〇三）
- (10) 竹下「解題」（『冷泉家時雨亭叢書』第七十八巻・朝日新聞社・二〇〇五）。同解題の指摘するとおり、第一・第二系統とは排列なども相違するが、本稿の趣旨とはかわらないので、零本と指摘するにとどめる。
- (11) 島津忠夫「拾遺抄から拾遺集——異本拾遺集をめぐって」（『著作集』第七巻・和泉書院・二〇〇五、初出一九

六二)、片桐『拾遺和歌集の研究 校本篇・伝本研究篇』(大学堂書店・一九七〇)など。

(12) 山崎節子「人麿家集の成立と拾遺集」(『中古文学』第二十四号・一九七九)

(13) 山崎「人麿集諸本の成立」(『國語國文』第五十卷第八号・一九八一)。以下山崎説は同論による。

(14) 『人麿集』諸本中の萬葉歌の数は、池原・藤田・朝比奈英夫『萬葉集』及び『人麿集』五系統歌番号対校表——附・大東急記念文庫蔵「人丸集」翻刻」(『古代中世文学論考』第三十四集・二〇一七年刊行予定)の認定によった。

(15) 後藤「異本柿本集と他系統柿本集との関係」(前掲(7)所収)

(16) 紙宏行「識語」(『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店・一九九九)に「卷末識語」との術語をみるが、巻頭の標記に関する記載はない。内容から推すと、牧野和夫の提唱する「書写識語」(『シンポジウム——奥書・識語をめぐる諸問題』『調査研究報告(国文学研究資料館)』第十七号・一九九六)も一案だが、ここでは識語の位置を重視し、「巻頭識語」(廣岡義隆先生からのご教示による)と呼称する。

(17) 巻頭識語の「一本書」を、「山上憶良の類聚歌林は一本の書也」(『袋草子』)と同義とみる前掲(8)竹下の説を追認し、稀観本の意と理解する。

(18) 「織前槐」が家良であることは、福田秀一「鎌倉中期

の反御子左派」(『中世和歌史の研究』角川書店・一九七二、初出一九六五)の指摘による。

(19) 久保田淳「家隆集の諸本とその伝来について」(『藤原家隆集とその研究』三弥井書店・一九六八、初出一九六二)

(20) 小林一彦「承空」(前掲(3)『和歌文学大辞典』)

(21) 平田喜信「拾遺抄・拾遺集の基盤」(『平安中期和歌考論』新典社・一九九三、初出一九七五)、久保木哲夫「私家集における部類意識」(『折の文学』平安和歌文学論)笠間書院・二〇〇七、初出一九九二)など。以下久保木説は同論による。

(22) 前掲(7)後藤

(23) 『和歌&俳諧ライブラリー』の底本は桂宮本だが、『細川家永青文庫叢刊 古今和調六帖』上(汲古書院・一九八二)を参照しても異同はない。

(24) 伊本の特定は困難だが、「伊本」という名称、定家との年代の近接を考慮すると、藤原伊経(？〜一二二七)本に比定する北井勝也「廣瀬本万葉集校合書入考」(『美夫君志』第六十九号・二〇〇四)の説が穏当だろう。

(25) 五月女肇志「藤原定家の万葉歌撰取」(『藤原定家論』笠間書院・二〇一一)

(26) 『萬葉集』との関係を論じたものとしては、前掲(7)後藤著が嚆矢であり、以降この方面の研究成果はほとんど提出されていない。

(27) 小川靖彦『万葉集と日本人 読み継がれる千二百年の

「歴史」(KADOKAWA・二〇一四)は、俊綱の書写時期を藤原頼通・彰子・教通が相次いで亡くなった承保二年(一〇七五)以降、まもなくの時期と推測している。

(28) 前掲(27)

(29) 三類本は寛元三年以前の伝来過程が不明であるので、「平安時代後期以降」以上の特定は困難だろう。判明している書写者を重視するなら、衣笠家良等の反御子左グループが『萬葉集』を尊重していたことを根拠に、家良を校訂者とみることも不可能ではないが、巻頭識語を読むかぎり、家良が書写以上の行為をおこなったとは考えにくい。おそらく寛元三年段階の本文は、すでに義空本にちかいいものであったろう。また、『萬葉集』などによって私家集が校訂・増補されるというのは珍しい事例であろが、藤田「赤人集・内閣文庫本の本文性格——歌仙家集本系及び万葉集との関係から」(『東京成徳短期大学紀要』第三十号・一九九七)が内閣文庫本系『赤人集』を材料に実例を提示している。ただし、該本は南北朝以降に校訂されたとおぼしい。平安時代後期から鎌倉時代にかけておなじような営みがありえたか否かは別途検討する必要がある。この点は今後の課題としたい。

安時代における『万葉集』訓読本文の研究——人麿集を中心として(課題番号・二二六三七〇二二七、代表・朝比奈英夫)の成果の一部でもある。

※本稿は平成二十七年・上代文学会秋季大会での発表内容を骨子とする。席上でいただいた種々のご教示に、記して御礼申しあげる。また、科学研究費助成事業(基盤研究C)「平